

MIT Press, Cambridge (Mass.) 1986.

4——Inventaire après décès de Jean Jacques Lequeu, 17 avril 1826
(ジャン＝ジャック・ルクー没後財産目録、1826年4月17日付), Archives nationales, Paris, M.C., XXX, 693.

5——ルクーの手稿「Nouvelle méthode(新方法)」には、イタリアとフランスの偉大なルネサンス建築家のひとりとしてブルネッレスキ、スカモツィ、パッラーディオ、アルベルティ、デロルム、セルリオ、デゴデに並んで「ポリフィリ」の名が登場する。

6——*Hypnerotomachia Poliphili*, In aedibus Aldi Manutii, Venezia, 1499. 日本では初の邦訳が八坂書房から2018年12月に出されたばかりで、人文主義研究者による注解を付した邦訳書の出版も計画されている。

7——Anonyme, *Discours du Songe de Poliphile* (ポリフィロの夢を巡る議論), J. Kerver, Paris, 1546. その後1554年と1561年に新版が出され、さらにペロアルド・ド・ヴェルヴィルによるフランス語新訳が挿図入りで出版された。*Tableau des riches inventions couvertes du voile des feintes amoureuses qui sont représentées dans le Songe de Poliphile*, Mathieu Guillemot, Paris 1600.

8——Jean-Jacques Lequeu, *Nouvelle méthode appliquée aux principes élémentaires du dessin tendant à perfectionner graphiquement le tracé de la tête de l'homme au moyen de Figures géométriques* (幾何学図形を用いて人間の頭部の輪郭を完璧に描くためのデッサン基本原理に適用した新方法), Paris, BNF, Département des Estampes et de la Photographie, Kc. 17 in-4, p.7.

9——Charles Percier, Pierre Fontaine, *Palais, maisons et autres édifices modernes dessinés à Rome* (ローマで設計された宮殿、住宅、その他の現代建築), Paris 1798.

10——「今日、専制政治の取り巻きはすべて消え失せた。芸術家たちはもはや悪徳に迎合して墮落することはない、彼らの才能を美德の勝利のために投じている。モニュメントは大きな影響を及ぼさねばならない。壁は語らねばならない。ますます多くの文章によって、われわれの建物を道徳の手本に変えねばならない」。Louis Pierre Dufourny, *Aux armes et aux arts* (武器を取れ、芸術を取れ), Détournelle, Paris 1793, pp.70-71.

11——André Chastel, “The Moralizing Architecture of Jean-Jacques Lequeu,” Thomas B. Hess, John Ashbery eds., *The Grand Eccentrics. From medieval to contemporary: the eccentric in painting, sculpture and architecture*, Collier et Collier-Macmillan, New York/London 1971, pp.57-66.

12——Jean Starobinski, *L'Encre de la mélancolie* (メランコリーのインク), Édition du Seuil, Paris 2012.

ロジャース・スターク・ハーバー＋パートナーズ

「マッカラン蒸留所とビジターセンター」

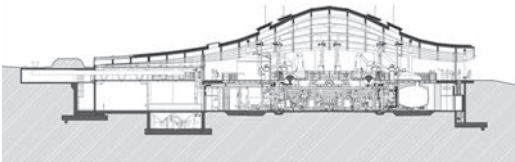
設計＝ロジャース・スターク・ハーバー＋パートナーズ

神殿と工場：風景への負荷の少ないハイテク蒸留所 マルコ・ピアージ

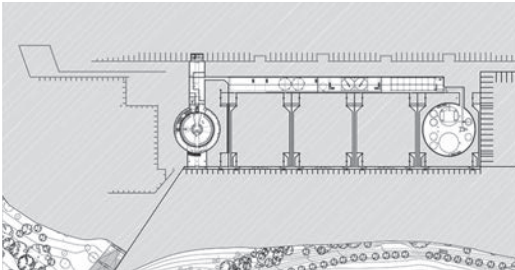
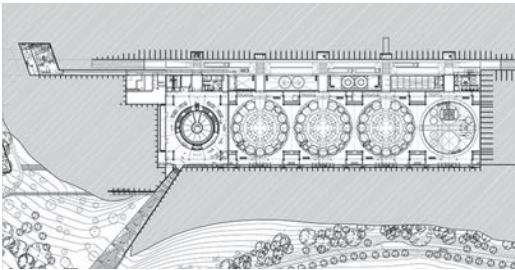
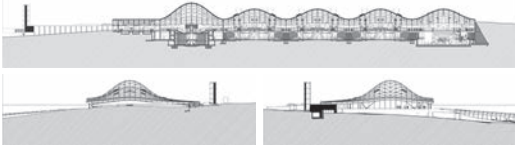
参照 | 本誌 pp.24-41

スコットランドでは、蒸留所観光が亡霊の棲む古城巡りを凌駕するようになって久しい。現に、スコットランドの国民的飲料の愛好者たちが、ウISKYの試飲や購入のために歴史ある生産地や地元の有名ブランドを巡礼者のように回る数は年々増えている。スコッチ・ウISKY協会(SWA)が毎年収集しているデータによると、2017年の訪問者数は190万人に上り、前年比11.4%に増加した。またスコットランドで現在稼働中の蒸留所は総計128ヶ所で、そのうち66ヶ所が公開ビジターセンターを備え、8ヶ所が予約制で訪問可能となっている。

現在、こうしたウISKY製造工場の3分の2がスベイスайдに集まっている。まさに「聖地」だ。イーニャス・マクドナルドが古典となった1930年の『ウISKY』に書いたように、琥珀色の液体を愛する者が「畏敬の念を抱かずに」近づくことは「不可能——少なくともあり得ないことに思える」。言うまでもなくマッカランは、スベイスайдの蒸留所の中でもエクサイズ(免許税)法制定直後の1824年に、この地域で初めてライセンスを得た蒸留所のうちで世界中に知られ最も評価の高いもののひとつである。アペラワー村近郊に広がる158ヘクタールの古い地所に



断面図



断面図／立面図／下階平面図

置かれ、そのうち37ヘクタールが大麦の栽培に充てられている。所有地内に今も建つ瀟洒な領主館イースター・エルシーズ・ハウスは、18世紀にジョン・グラント大尉によって建てられた。正式な許可を受けた蒸留所の創立者は、19世紀初頭にシーフィールド伯からこの領地を借りて



南からの全景



全体構成図



南東より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan



左に試飲エリア、右に製造エリアを見る

いた農園経営者のアレキサンダー・リードである。ただしその後には蒸留所の名声を確立したのは、マスター・ディスティラー（蒸留責任者）のロデリック・ケンプである。彼はスカイ島のタリスカー蒸留所の共同所有者だったが、1892年にこのスペースサイドの蒸留所を買い取り、拡張・改良のうえマッカラン＝グレンリベットに改称した（グレンリベットの名は1980年に外された）。蒸留所はケンプの子孫（特にシャーチ家）の管理下に置かれ続けたが、1996年にハイランド・ディスティラーズに経営権が引き継がれた（現在はエドリントン・グループ傘下）。国際的な大成功が訪れたのは1980年代である。「ブレンデッド」[複数のシングルモルトにグリーンウISKキーを加えたもの]需要の落ち込みを受けて、マッカランは自社の「シングルモルト」を直接市場に打ち出し、売り上げは短期間で120%に増えた。2000年代初頭に公衆の支持がさらに高まった背景には、厳選したシェリー樽のみを使った醸造から、より柔らかく軽い味のウISKキーができるバーボン樽を含めた醸造への切り替えがあった。商業的な反響の増大に続き2008年に第2のスティールハウス（蒸留所）が復活されたことによって、マッカランの生産力は倍増し、新たな熟成倉庫の建設が急務となった。最終的に、2014年にエドリントン・グループは、1億ポンドを投じて既存の施設から400m離れた位置に完

全に新しい蒸留所を建設し、そこに全生産拠点を移す計画を発表した。建設計画は設計競技を経てロジャース・スターク・ハーバー＋パートナーズ建設設計事務所（RSH+P）に依頼された。最適で熟練した設計事務所の中でも、最終的に、グローバルとローカルの調停を論じる設計テーマに明らかに力を注ぐ事務所だ。課題となったのは、世界的名声を誇るブランドのスケール拡大とイメージの飛躍を表現することだった。マッカランの成功は地球上のある特定の土地の水と土の特質に拠っている。RSH+Pはこの建設計画をわずか3年半で完了した。技術コンサルタントはアラップ、照明技術はスペアーズとメイジャー、ランドスケープはジルスバイズが担当した。設計責任者を務めたシニア・パートナーはグラハム・スタークで、彼は2008年にスペイン、バリアドリッドのプロトス・ワイナリーを設計している。スタークはこの仕事を解釈するにあたり、評価の高いイギリス設計事務所が得意とするハイテクの枠組みと、「グレート・ランドスケープ・ヴァリュー保護地区」指定に伴う、環境負荷の低減という課題とを融合させた。この計画のもうひとつの特異点は、同じ建物に産業と観光、製造工場とビジターセンターを統合する意向に由来する。

採用された解が想定したのは、鉄筋コンクリートで大

容量の単一建物を作ることだった。擁壁は厚さ30cmとされ、全体が傾斜地の中に沈む。木造の吊り屋根は緩やかに波打ち、野生の草花のマントで覆われた。これが、周囲の起伏ある田園の間で建物の存在を、消すことなしに和らげている。半地下になったオープンスペースの内部に列をなしているのは、見学者受け入れのための多機能エリア、3つの蒸留ユニット、大麦を浸漬する部屋である。これらの空間分割は、似たような輪郭の連続によって外観に明確に刻まれているが、多機能エリアだけは非常に目を引く放物線によって特に強調されている。鋼管によるリングをフォーク形の柱で支え、その上に波打つ大屋根が据えられた。38万個の異なる薄板で組み上げたジオデシック構造である。化粧張りしたものとそうでないものがあるが、湾曲させたパネルは1枚もない。その成果が梁成75cmの格間天井で、製造機器を上から包むように躍動的に展開する。この動きによって、蒸留設備から周囲の屋外風景へと視線を移させる。風景は、周壁の広い水平連続窓によって切り取られている。ファサードを構成するのは、幅3mで高さが2.6mから5mに変わる複層のガラスパネルである。基礎の上に載せられ、柔軟に伸縮するジョイントで頂部が固定されている。3層ガラスの支柱によって、ファサードのガラスパネルを——透明性を損なわずに——支え補強している。

神殿と工場の間と呼べるこの壮大な空間の内側では、ウISKキーの製造過程とそれを可能にする各種設備が主役を務める。仕掛けはオープンにされている。通常は見えないものがすべて開示され、裸にされ、スペクタクル化されている。例えば麦芽汁をいれるステンレス製の大樽（マッシュ・タン）、それより小さい発酵樽（ウォッシュ・バック）、コンデンサーとその後の蒸留を行う銅製の蒸留器（スティル）。それらすべてが集められて円形に連なる演劇的なメリーゴーラウンドを形成し、非常に複雑な設備配管のネットワークによって大屋根の下で結びつけられる。配管のネットワークは、1890年からロセスでブリキ屋を営むフォーサイズという歴史ある職人企業の驚くべき技巧で製作・設置された。特定のディテールを観察していると、リチャード・ロジャースが1970年代と80年代にパリのボンビドゥー・センターあるいはロンドンのロイズ本社ビルといった彼の重要な偉業において顕示した、「フロア」や「チャンネル」といったレトリックを想起せずにはいられない。建物の南端に置かれたビジターセンターは、実際に

蒸留所の受付の一種として構想されており、高さ10mのガラス壁で製造エリアと統合されかつ分離されている。このガラス壁は、自動の消火スプリンクラー設備とともに防火区画用の間仕切壁(2時間の耐火性能)として機能する。ビジターセンターの導入部をなす展示ギャラリーで、見学者たちは蒸留所の歴史的出来事を辿る。ビジターセンターの中核をなし見学が最も盛り上がるのは、鉄筋コンクリートのドラムの上に置かれた試飲用プラットフォームである。ドラムの内側にはゲスト専用のウイスキー貯蔵庫があり、精製工程で得られた「スピリット」が、作り付けの木棚の複数の棚板に放射状に並べられている。スピリットはシェリー酒製造に使われた樽に最低3年間寝かせられ、熟成される。この2層吹き抜けの壁構造は、プロトホと呼ばれるスコットランド特有の古代巨石建造物にヒントを得たものだ。その内部の、ダンネージと呼ばれる伝統的な熟成倉庫とよく似た、一定の温湿度に管理された微気候環境で、ウイスキー樽が保存されながら展示される。天井の中央に円形のトップライトが開けられているため、希少で示唆に富む酒蔵を上から見学することもできる。

作品:マッカラン蒸留所とビジターセンター
設計:ロジャース・スターク・ハーバー+パートナーズ——
グラハム・スターク、アンドリュー・モリス
担当責任者:Toby Jeavons
協働者:K. Darlington, L. Day, P. Dennis, J. Dent, M. Dowd, M. Fairbrass, T. Frenzen, G. Giovanni, J. Guell, K. Gray, E. Hiscock, J. Hwang, A. Kempa, J. Kennedy, A. Lau, E. Lewith, A. Main, T. Mason, N. Mitchell, S. Saudi Ibreek, T. Smith, E. Swarbrick, A. Tobin, C. Wilkinson, R. Willard, A. Yek, E. Young
構造・設備・防火・土木・輸送:Arup | ランドスケープ:Gillespies
照明技術:Speirs + Major | 展示構成:Atelier Bruckner
蒸留設備:Forsyths | 施工:Robertsons Construction Group
ランドスケープ整備:HLD | 現場監理:Equals Consultancy
コンサルタント・供給企業:Sh Structures; Weihag; Topek/Sky Gardens; Glass Solutions; Beck; Metalwork Uk; IFT; Armacoat; HSR; Decomo
規模:建築面積 14,800m²
スケジュール:設計競技 2012年/実施設計・施工 2014-18年
所在地:Charlestown of Aberlour, Speyside, Scotland, U.K.

RSH+パートナーズ——グラハム・スターク

参照 | 本誌p.33

パリでボンビドゥー・センターが落成した日から1年余りが経った1978年に、リチャード・ロジャースはもうひとつの設計競技で優勝する。ロンドンのロイズ本社建設のために告示された設計競技である。

レンゾ・ピアノとの友情は確固たるものであり、議論になったこともない。しかし2人の協働体制は終了しており、ロイズ本社の建設はロジャースにとって新たな建築家キャリアの始まりを意味した。その後の2007年に、ロジャース・スターク・ハーバー+パートナーズ建築設計事務所が結成された。現在、事務所には約200人が働いており、すでに一般化した運営モデルに従って、創立メンバーのそれぞれが請け負ったプロジェクトの責任者として実現に勤しんでいる。

グラハム・スターク(1957年生まれ)はロンドンのAAスクールとキングストン工科大学で建築を学んだ後、1983年にリチャード・ロジャースと仕事を始めた。2011年からシニア



ペリメーター・ゾーン



ビジターセンター: 試飲エリア



醸造エリア



蒸留ユニット:上階



蒸留ユニット:天井見上げ



ゲスト専用のウイスキー貯蔵所

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

アレハンドロ・メディナ +
レイエス・リオス + ラライン +
ムニョス + ケスネル

「パラシオ・デ・ラ・ムジカ」

設計 = アレハンドロ・メディナ + レイエス・リオス + ラライン +
ムニョス + ケスネル

公共空間のためのサウンド・ボックス

フランチェスカ・セツラザネッティ

参照 | 本誌 pp.52-61

メリダ中心部は整然とした道路網が敷かれているため、方向を見失うことはまずない。直交座標のうえに建設されたこの都市は、街路名にまで数の厳密な韻律を用いている。南北方向の道路には偶数が、東西に都市を横切る道路には奇数が使われる。密と疎の織り成すこの碁盤目では、住宅群がコンパクトなブロックに分かれ、植民地時代の聖堂や建物の間に置かれた中心の広場に面している。中央の緑地に音楽と木陰が集まる一方、住民が集まる場はわずかで、建物がブロックを囲んで中庭と内側の空間を守る。鉄柵と歴史的建造物による古い壁が全体の境界をつくる。都市中心部の、カレ59とカレ58の角に昨年6月に完成したパラシオ・デ・ラ・ムジカ・メキシカーナも、この構成を免れない。立地する歴史的なコンテクストに対する一定の感受性からも無縁ではいられない。

その一方で、ユカタンの建築家らの活動において、過去の建築との関係はしばしば影響力の大きいしがらみとなる。建築的遺産はマヤ文明の遺跡から植民地時代の建物まで、さらに19世紀に半島の田園部に狙いを定め、「エネケン」産業を隆盛させたハシエンダ(農場)群まで多岐にわたる。エネケンとはこの地域一帯に広がる植物で、縄紐を作るのに適した繊維が採れる。保守的なアプローチの時もあればより侵犯的な工事の時もあるが、再生され増築されてミュージアム、ホテル、個人住宅、催事スペースに改変されたハシエンダこそ、近年この地域で最も興



上空より見る



エントランス・エリア



ガラス・キャノピー



エントランス・ホール



博物館内部

のホールはいずれも天井に構造梁が露出していて、梁4本ごとに1本の間隔で円筒状の金属製カバーに収められたLED照明が取り付けられている。上向きにセットされた照明の光が反射によってホール内に広がり、館内は外の自然光と遜色のない明るさが保たれている。また、梁と照明は天井部に空のような奥行感を与え、地下にいても、実際の感覚としては外の陽の光の中にいるのと同じ。西部開拓の歴史にまつわる館内展示を一通り見終えると、最終的に旧裁判所に面した出口に辿り着く。すなわち開拓の産物である都市、セントルイスの街と対面することになるのである。

【参考文献】

キアラ・バリオーネ「エーロ・サーリネン：西部のゲートウェイ1947-1965」『CASABELLA』850号、2015年6月号、pp.4-27 | 『CASABELLA JAPAN』850号、pp.1-9

作品：ゲートウェイ・アーチ博物館

ランドスケープ・デザイン+全体統括：

Michael van Valkenburgh Associates

エントランス・デザイン：ジェームズ・カーペンター・デザイン・アソシエイツ
—— James Carpenter (principal),

Joseph Welker (senior design/project manager)

デザイン・チーム：Richard Kress, Katharine, McClellan,

Garrett Ricciardi, Reid Freeman, Stephanie Hui,

Xavier Schirlin, Allison Wills, Chris Pietsch, Duncan White,

Devin Hines, Walter Shih, Rayme Kuniyuki

博物館デザイン：Cooper Robertson

ローカル・アーキテクト：Trivers Associates

アクセス通路：Cohen Hilberry Architects

土木エンジニア：David Mason & Associates

構造設計：Alper Audi

ガラス・エンジニア：Eckersley O'Callaghan

照明：Tillotson Design Associates

施工：McCarthy, Alpha Paric

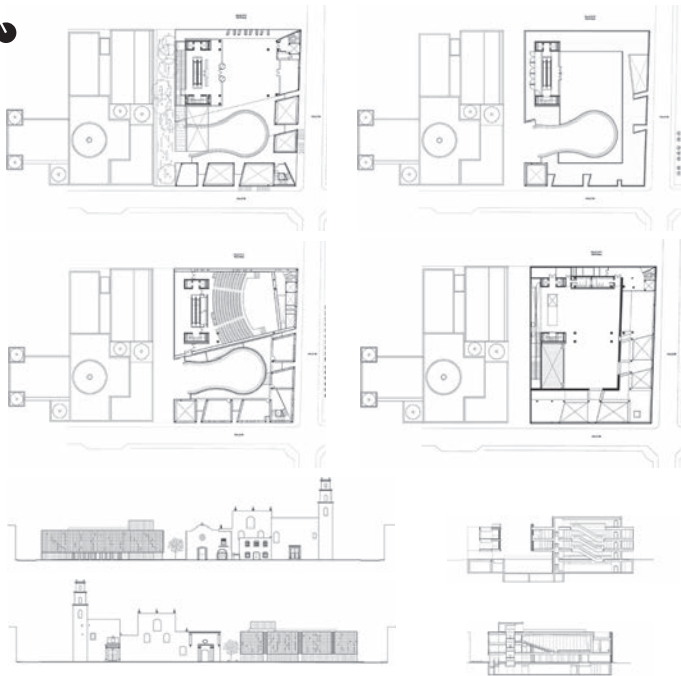
展示計画：Haley Sharpe Design

土地所有者：National Park Service

建築主：Gateway Arch Park Foundation

スケジュール：設計競技 2010年/設計・施工 2010-18年

所在地：11 N 4th St, St. Louis, Missouri, U.S.A.



各階平面図/立面図/断面図



左にホール、右にオルデン聖堂を見る



南側全景：車道側



北側全景：歩道側

味深い設計活動の大半を占める。そのため、ゼロから建設する時でも、建築は過去の遺産に由来する色彩、素材、技術と向き合うのである。

パラシオ・デ・ラムジカの配置、空間構成の選択と素材の選択は、共同設計者となった4つの建築設計事務所（アレアンドロ・メディナ、レイエス・リオス+ライン、ハビエル・ムニョス、ケスネル）が、国立考古学歴史研究所（INAH）から示された基準に歩み寄りつつ協働した成果である。

コンサート・ホールの建物は、都市の整然としたグリッドに従ってブロックを完成させ、ホールに接する2本の車道と1本の歩道に対して閉じている。4つめのファサードは隣接するヘスース・デ・ラ・テルセラ・オルデン聖堂から分離された。聖堂との間に緑地のある歩道が新たに通され、空間と17世紀の聖堂の眺めが確保された。

コンパクトなフォルムにもかかわらず、設計案を導くのは、新たな公共空間として都市に開くという意志である。そのため、内省的なブロックに見えるものが、地上レベルの切込みによって開かれ、1階平面を凹ますことで生まれた広場へと誘う。車道と連続した広場は、上階に張り出したオーデトリウムで覆われ、夏の雨から防ぐとともに風が交差して通るため涼しい。

マッシヴなヴォリューム群だが、車道側の2面のファサードに入れられた細い切込みによって軽さが生まれている。

こうして石灰岩（この地方の特産）ブロックによる基壇が作られた。その上部は、より寸法の小さなブロックによるファサード仕上げとなっている。石材によって、計画エリアと隣り合うイエズス会聖堂とも、わずか2ブロックしか離れていないサン・イルデフォンソ大聖堂とも、色彩と素材の面で連続性が作り出された。

ファサードの上層部では、仕上材の石の幾何学に倣ってガラスの要素が挿入され、夜になると色とりどりに輝く。これらの黒っぽい開口部は、鍵盤楽器の音符コードを建築的に翻案した秩序にしたがって配置されており、メキシコの作曲家アルマンド・マンサネロの「Esta tarde vi llover」という歌の一部を再現している。石の上にわずかに突き



南上空より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan